

日本・カンボジア友好 60 周年、ASEAN40 周年

～Japan & Cambodia A Night at the Opera Gala Concert～

清水 のりこ

2013年9/13～23、筆者は在カンボジア日本国大使館の招聘でカンボジアに演奏旅行の機会を頂いた。イタリアオペラ、日本の歌、カンボジアの作曲家によるオペラ、器楽作品などを演奏。アンコールワットの町シエムリアップ、首都プノンペンにて大きなコンサートを2回、芸術大学・日本人学校・教員養成学校・私立小学校でワークショップ（演奏とお話）を6回、孤児院の子供のためのチャリティミニコンサートを1回、大使館での演奏会・レセプションという8泊10日であった。

当時から少し時間が経ってしまったが、カンボジアにエレクトーンがはじめて入った記録として残しておきたい。



小川里美(ソプラノ) 村上公太(テノール) 彌勒忠史(カウンターテナー) Savy Him(フルート) Ikeda Bonsamrang(クラリネット) 清水のりこ(エレクトーン)

9月13日(14日)～16日

出発・リハーサル

夕方まで渋谷のエレクトーンシティで稽古して、小川・清水はリハーサルのため先に現地に向かった。午前中に到着、お昼には担当とミーティング、午後から大使館にてリハーサル。

ここで初めて顔合わせのフルート奏者Savy Him氏、2回目にお目にかかるIkeda Bonsamrang氏とのリハーサルがメイン。サヴィ氏はカンボジアでは有名な音楽一家の方で、演奏曲のひとつはご主人のKEO Sophy氏の作品「Cherng Phnom Cher Kach～The Foot of Chrr Kach Mountain」という、原曲はヴァイオリンとピアノのための作品。

もともとオーケストラを想定して作曲された曲ではない。曲に関する情報は送っていただいた動画のみ。オーソドックスな小室内楽風編曲と、エレクトーンならではのサウンドを生かした編曲と、二通り用意して行った。合わせてみて、どうもサヴィ氏がしっくり行かない表情をされていたので、曲のイメージや由来を尋ねた。動画よりも、かなりゆっくりロマンティックに演奏されたいらしいということがわかった。

今回カンボジア初のエレクトーン演奏のために、ヤマハはD-Deckを2台送ってくださっていた。そのうち1台はホテルの部屋に置いて頂いたお陰で、リハーサルでソリストの要望を直接聞いた後、夜に全てやり直すことが出来た。

翌日は本番会場のインターコンチネンタルホテルの大ボールルームでリハーサル。この日はワークショップ用に大使館が借りたスピーカーを使用。電子楽器はスピーカーによっても出音をかなり左右される。このリハーサルでスピーカーの特性をつかみ、リハーサルの後改めてホテルの部屋のエレクトーンでレジストレーション調整。

3日目、16日はシエムリアップへの移動。

朝8:00にホテルの部屋のエレクトーンは運び出され、陸路6時間かけてシエムリアップへ。我々は後から空路シエムリアップへ向かいお昼過ぎに到着、午後からメリディアン・アンコール内の会議室でリハーサル。

この日のリハーサルは大変充実していて、フルートのサヴィ氏が演奏する表情にやわらかさが出てきてい

た。そして、日本の「ふるさと」をモチーフに作曲された曲に奮闘されていたクラリネットのソムナン氏の演奏も、勿論私も変わってきたのが感じられた。

お互いの国の作品に敬意をもち、妥協することなく理解しようとする姿勢が大事であると感じた。人同士の良いコミュニケーションも出来、信頼関係のようなものも出来たリハーサルであったと思う。

9月17日

ワークショップ□一二三日本語学校

9:00-10:00、この日一つ目のワークショップ。ソプラノの小川里美氏の司会で進行した。小川氏は1999ミスユニバースジャパンとして国内外で活動されていたご経験もあり、素晴らしい進行であった。エレクトーンは一言でいうとどんな楽器？から始まり、多彩な音色、両手足を駆使したリアルタイム演奏を実演を交えながら進めた。

それぞれの楽器の紹介、演奏は全部で6曲。この学校は1995年開校の日本人による日本語学校で、日本語ガイドを輩出している。校舎は改築中の梁丸見え、壁も無いところがあったり、教室の中を痩せこけた病気の犬が歩き回ったりするような環境であったが、現地の生徒さんたちは、普通にアイフォンやアイパッドを持ち、片言の英語も日本語も喋っていた。

バスが見えなくなるまで、校舎の屋根に上って手を振ってくれる子供たち・・・まるでテレビで見たような光景であった。

ワークショップ□ワット・エンコーサイ小学校

移動して11:00-12:00は2回目のワークショップ。こちらの小学校にはエレクトーン出身の日本人教師がいらっしゃった。この方については別機会に詳しく触れようと思う。

ここでも各楽器の紹介、演奏、そして質疑応答。子供たちの瞳は澄んでキラキラしていた！

9月18日

ワークショップ□ 教員養成学校その他

夜は1つ目の大きな演奏会。その会場（メリディアンのボールルーム）にて11:00-13:00ワークショップ。今回は教員養成学校の学生と教師が中心のワークショップであった。特に現在、芸術大学の講師をなさって

いるフルートのサヴィ氏に、将来の指導者にむけて多く語っていただいた。終演後はエレクトーンに座ってみたりエレクトーンと一緒に写真を撮ったりする学生が大勢いた。

Japan&Cambodia A Night at the Opera Gala Concert □

一回目のメインコンサート。シェリムアップでの公演は現地を訪れていた日本の松山外務副大臣もご臨席された。翌朝、プノンペンへ戻る。

9月19日

在カンボジア日本国大使館コンサート・レセプション

18:30から大使館主催のレセプション。前半は我々の演奏会。こちらに招かれた方々は、元日本留学生を中心に150人程度。日本に留学するような方々はカンボジアの未来を担うエリートだそうで、大使館としても良い関係を続けていきたいとのこと。その他、Royal Government of CambodiaのMEY Kalyan氏や文化関係の要人の方々も来場された。ここではエレクトーン・ソロも含めて7曲演奏。

カンボジアはポルポトにより、当時文化人や教育者が虐殺されてしまったため、クラシック音楽不毛の地となった。ここで、10数年前からプノンペンに根付いて、教育活動、音楽普及をされている日本人が、池田尚子氏。演奏をお聞きになりながら、まだ何も浸透していなかった頃のこと、そして今、生きた音楽がカンボジアで聴けることに感動され涙を流されていた。我々もその姿を見て、今回のツアーの意義深さ、責任の重さを感じた。

レセプション終了後は、大使公邸にお招きをうけ大使ご夫妻との歓談。翌日の演奏会への関係者の方々の期待が伝わってきた。

9月20日

ワークショップ□ 王立芸術大学その他

夜のコンサート会場のホテル Intercontinental Phnom Penh のGrand Ballroomにて、プログラムからの抜粋と質疑応答。今回のワークショップの中での唯一の芸術の専門教育機関で学生だけでなく、教授陣も来場。演奏が始まると、客席からは感嘆の声が聞こえ、大拍手に演奏者のテンションも多いに上がる。エレクトーン・ソロでは歓声が上がった。質疑応答では

「村上さんのようなテノール歌手になるためには？」などの質問、そしてエレクトーンの周りに人だかりができ、鍵盤のタッチについて、音の变え方について、価格について、足鍵盤の演奏法についてなど嬉しい質問攻めに合った。

Japan&Cambodia A Night at the Opera Gala Concert □

いよいよ2つ目の大きな演奏会。ロイヤルファミリーや上流階級の方々もお越しになる。筆者は普段のエレクトーン伴奏ではジャケットにパンツスタイルで敢えて女性らしさを出さずに、舞台の上の女性はブリマドンナのみ、という意識で衣装を選んでいるが、今回はドレスにしてくださいとの要望があり、動きやすいドレスを選んで持参した。

Concert Program

- Rentaro TAKI / Hana (soprano, countertenor)
- Rentaro TAKI / Koujou no Tsuki (tenor)
- Fumio YASUDA / Poem on Furusato (clarinet)
- KEO Sophy / Cherng Phnom Cher Kach - The Foot of Cher Kach Mountain - (flute)
- HIM Sophy / from "Where Elephants Weep" The Gate Will Open (soprano, tenor)
- G. Caccini / Ave Maria (countertenor)
- A.L.Webber / Pie Jesu (countertenor, soprano)
- John Rutter / from Suite Antique #2. Ostinato (flute)
- W. A. Mozart / from "Le nozze di Figaro" Voichesapete (countertenor, electronic organ)
- G. Bizet / from "Carmen" Prelude (electronic organ)
- P. Mascagni / from "Cavalleria Rusticana" Ave Maria (soprano, flute)
- G. Puccini / from "Turandot" Nessun dorma! (tenor)
- A. Piazzolla / Oblivion (clarinet)
- The Late King Father NORODOM Sihanouk / Charmante (tutti)
- G. Verdi / from "La traviata" Brindisi (tutti)

2度のスタンディング・オベーション。演奏者も感動の中終わることが出来た。「Charmante」は国王作曲。事前に我々の手元には一段メロディー譜と

YouTubeの音源のみ。慣れないクメール語を歌手はカタカナをふって歌い、エレクトーンアレンジも和音を変え、サウンドを豊かに（ソムナン氏、サヴィー氏に聴いていただきOK）した。不敬罪を恐れていたが、お客様は大層喜ばれていたようで、またソムナン氏夫妻からも今までで最も立派な「Charmante」の伴奏と言われ安心した。アンコールは全員で「花は咲く」、涙を流す方も多くて、筆者も涙が流れるまま演奏。王女さまからお言葉を賜るなど貴重な経験も。メンバー中、唯一、彌勒氏のみが正しい王族への接し方を全うされた。

プノンペンでは650名が集まり、日本では考えられないような方々が最初から最後まで聴いてくださった。ハオ・ナムホン副首相兼外相、ノロドム・ボパテヴィ王女、他王族3名

エック・サムオル憲法評議会議長（副首相級）、ヴァー・キムホン上級大臣、キュー・カニャルット情報大臣

トン・コン観光大臣、イン・カンタパヴィー女性問題大臣、副大臣級4名

ヴァン・モリバン国王顧問、プノンペン市副市長ロイヤル・アカデミー総裁

当地駐在各国大使（米、EU、クウェート、韓国、シンガポール等）

国際機関の長（UNDP、IMF、世銀、WHO、ユネスコ等）

英字紙プノンペンポスト電子版（プノンペンでのコンサート）

https://www.facebook.com/?ref=tn_tnmn#!/media/set/?set=a.565176496865292.1073741844.549217041794571&type=1

9月21日

ワークショップ□□ プノンペン日本人補習校

演奏会翌日は午前中からプノンペン市内にある日本人学校でのワークショップ。幼稚園生、小学生と2回に分けて行った。エレクトーンの説明の際、思いつきでジブリの作品を演奏すると、子供たちが笑顔で歌いだし、身体を動かす子も。何処にいてもジブリは人気がある。

ミニ・チャリティコンサート ソロノ音楽学校に隣接したカフェ

日本人補習校を後にして、小川里美氏と筆者はソロノ音楽学校へ。もともと、このカンボジアツアーの実現は、前年に小川氏が招聘されたことがきっかけとなっている。この時、キアラ（Chiara Angkor Music Production）というプノンペンに住む日本人・カンボジア人の音楽家が数名集まって作ったグループで演奏会をされた。このチャリティーコンサートはキアラの企画で、現地の音楽に興味を持つ子供たちや、孤児院（孤児とは限らない、親の都合で入れられることも多い）の子供たちも招いて音楽を聴いてもらうという趣旨で実施された。またソロノ音楽学校はキアラの大ロスポンサーでもあるので、音楽学校横のカフェを利用したそうである。

この演奏で全ての演奏の行程が終了した。

結び

二都市での演奏会は素晴らしい経験であったが、演奏家としてもっとも心を打たれたのは、ワークショップだった。現地の子供たちの目の輝きは美しくキラキラしていた。そこでは、子供達が「本物の芸術」に触れ

ることが目的であったが、むしろ私たちが本物の純粋な心に触れたのであった。

そして言葉は通じなくても、音楽は世界共通の言葉になり得る、音楽で人と繋がっていけると実感した。今回のカンボジア訪問で改めて思ったのは、これは常々、小川氏や仲間たちと話していることであるが、自分たちが演奏して人が喜んでくれることが、私たちの無上の喜びである。私たちが音楽をやる意義はそこにある。そのためには、どのような苦勞をしても経済に結びつかなくても、活動の意義は大きい。

以上、2013年9月13日から23日までの記録である。演奏終了後の翌日から帰国まではまだ記しきれずにいる。記憶が風化する前に残しておきたいと考えている。

尚、日本とカンボジアの架け橋となり、演奏会を実現された池田尚子氏は「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」で優勝され、2015年10月カンボジア初となる音楽教室Neak Poan School of Musicを開校された。

（電子オルガン演奏家 しみず のりこ）

